

小児看護学実習後の学生のルーブリック評価と 自己教育力との関係

Relationship between student's rubric evaluation after child nursing practicum and self-educational ability

菊池 美保子 原田 美枝子 前山 直美

Mihoko KIKUCHI Mieko HARADA Naomi MAEYAMA
(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：自己教育力 ルーブリック 看護学生 臨地実習

I はじめに

発展し続ける医療社会の高度化、専門化、そして保健、医療、福祉を取り巻く社会情勢の変化の中で病院には、他国の患者も多くみられるようになった。これらを背景に看護職は様々な人々の価値観の多様化に迅速な対応を求められている。そして、現場においては状況に応じ自ら判断し看護する場面が多くあり、どんな変化が起きてもその変化に主体的に対応できる能力が必要である。そのため、自己教育力を身につけることが重要である。平成15年に厚生労働省から発表された「新たな看護に対する検討会」¹⁾平成16年の「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」²⁾では質の高いケアを提供するために生涯にわたる学習、教育が必要であることが明文化された。看護師として専門性を高めるための基盤として、学生のうちから自ら学習し続け、変化に対応できる能力、いわゆる自己教育力を高めていく必要がある。

自己教育力という用語は昭和58年11月中央教育審議会教育内容等小委員会の「審議経過報告」³⁾において打ち出され、学校教育上の課題として自己教育力を育成するための教育のあり方が模索、試行されている。これは、IT化が進み情報化社会にあることや国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化など、社会の変化に主体的に対応できる能力をもつ個性的で多様な人材を育てる必要があるとされている。尾崎⁴⁾は「自己学習力」を超えて広く人間づくりを問題とし人間の問題をより総合的に捉える概念であるといっている。看護はまさしく人間を相手にする職業であり、看護師個々の「自己教育力」が問われると考える。梶田⁵⁾は自己教育力を「自分自身

で学び、成長、発展していける力」と定義しており、自己教育性の4つの側面として自己教育を行って行く上で現在の自分から脱皮して少しでも優れた存在へと自分自身を引き上げていくという「I成長・発達への志向性」、その志向性に沿って、自分自身を一步一步自ら前進させていく自分自身に働きかける力「II自己の対象化と統制」、その前進の過程で道具的な意味を持つ学び方や基礎学力いわゆる学校教育で直接的に形成される具体的な形での学力「III学習の技能と基盤」、そして「IV自信・プライド・安定性」は、上記の3側面を最も深いところにおいて支えるものであり、全てを一人の人格の中に落ち着かせ安定した土台の上に立って前進を可能にする心理基盤であると捉えるとしている。看護学生がもっとも自己教育力を育成する場は臨地実習にある。

A短期大学小児看護学実習では、平成27年からルーブリック評価表を導入している。ルーブリックによる実習評価表の目的は客観的評価だけでなく、実習目標を達成するための学習活動を示し、評価基準を設けて到達度を明確にすることで、学生の学習意欲や課題の達成感を与えるものである。しかし、日々の学習の中でも、自分で調べたり考えを述べたりするグループワークやカンファレンスなどは苦手で、自己教育力測定尺度の「学習・機能・基盤」の項目が、低い傾向にあると考えられた。臨地実習では、指導者から「質問しない」「積極性がない」「自分から行動しない」など、学生の受身の姿勢が指摘されている。また、学生が自らルーブリック評価表を携帯し、確認し振り返りながら記録の整理をするなどの行動は少なく、教員は日々のミーティングの際に到達度を確認しながら学生の到達点を高められるよう指導する必要があった。これらのことから学習の基盤である「思考・判断」「知識、理解」など、すなわち「自己教育力」が

受付日 2017年11月20日

受理 2018年1月31日

低いと考えられた。ルーブリック評価表の、基礎的な「知識・理解」は対象を理解するうえで大切な要因である。そこで、自己教育力測定尺度の調査で学生の自己教育力の傾向を知りルーブリック実習評価表との関係性を分析することは、効果的な教育介入を考えるうえで有効であると考えた。

II. 目的

学生の自己教育力測定に有効と言われている西村らの自己教育力測定尺度と小児看護学ルーブリック評価表との関係性を明らかにし教育的介入の示唆を得る。

III. 方法

1. 調査対象者：平成28年度小児看護学臨地実習を履修し本研究への参加同意を得られたA短期大学に在籍する3年生で研究に同意が得られた75名
2. 期間：平成28年5月～平成28年10月
3. 調査方法：小児看護学臨地実習終了後に自記式調査票を配布し留め置法で回収した。
4. 調査内容
 - 1) 西村³⁾らが作成した自己教育力測定尺度：この尺度はⅠ成長発展への志向、Ⅱ自己の対象化と統制、Ⅲ学習の技能と基盤、Ⅳ自信・プライド・安定性の4側面からなり、それぞれ10の下位項目で構成されている。自己教育力は、4側面の総合得点をいい、得点が高くなるほど、学生の自己教育力が高いことを示している。各側面の得点から学生の自己教育力の傾向がわかる。選択肢は「はい」2点、「いいえ」1点の2件法で回答する。
 - 2) ルーブリック評価表：小児看護学領域担当教員で平成26年度作成、平成27年度から使用し、一部修正したものを平成28年度使用。学習活動は1. 子どもの成長発達が理解でき、子どもの特徴を捉えることができる。2. あらゆる健康段階の子どもと家族に対して援助が出来る。3. 小児看護チームの協働の必要性が理解でき、責任ある行動がとれる。4. 子どもの人格を尊重して子どもとのかかわりが持てる。5. 地域社会における小児看護の役割を理解する。の5項目で、評価規準は「関心・意欲・態度」(3)「思考・判断」(7)「技能・表現」(4)「知識・理解」(6)の20項目で構成されている。評価基準は3段階評価とし、評価A(5点)：十分達成した状態、評価B(3点)：おおむね達成できた状態、評価C(1点)：一部達成できた状態の3件法とした
 - 3) 分析内容：基礎集計後の統計解析はExcel 2010を使

用した。自己教育力4側面の総合得点中央値で高群・低群に分けて、自己教育力得点、自己教育力の4側面の平均得点のウィルコクソン検定をおこなった。統計学的処理について有意差の判定は危険率5%以下を有意とした。

III. 倫理的配慮

本研究はA大学研究倫理委員会の承認を得た後に実施した。(承認番号第407号)。研究協力者に研究目的と意義及び方法の説明を行い、研究への参加の有無が学業成績や単位認定には全く影響しないこと、個人のプライバシーは完全に守られていることを明記した文書で説明しデータ使用と公表の承認を得た。

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

実習終了後ルーブリック評価の対象者は75名(回収率100%)男性5名、女性70名。自己教育力測定尺度の有効回答率は72名(96%)であった。

2. ルーブリック評価

ルーブリック評価の総得点の平均は71.4点で、最高82点、最低40点であった。到達目標達成度平均点(表1)は「関心・意欲・態度」は15点満点中平均11.4点で76%、「知識・理解」は30点満点中平均20点で66.6%、「思考・判断」は35点満点中平均23.8点で68%、「技能・表現」は20点満点中平均15.4点で75%であった。「関心・意欲・態度」と「技能・表現」は75～76%で「知識・理解」「思考・判断」は67～68%とゆるやかな2極化が見られた。各項目(表2)の平均は5点満点中「関心・意欲・態度」は 3.1 ± 0.54 、「思考・判断」は 3.5 ± 0.23 、「技能・表現」 4.8 ± 0.6 、「知識・理解」は 3.7 ± 0.27 、であった。

ルーブリック評価総得点の中央値(71.4点)で高群・低群に分けて学習活動5項目(表3)を比較してみると、高群・低群共に同じ傾向が見られ「思考・判断」「知識・理解」が必要とされる項目が多い評価規準2)のあらゆる健康段階の子どもと家族に対して援助ができるは、高群 3.7 ± 0.28 、低群 3.3 ± 0.35 、3)の小児看護チームの協働の必要性が理解でき行動できるが、高群 3.7 ± 0.53 、低

表1 ルーブリック評価達成状況

n = 75

	平均得点	達成度%
関心・意欲・態度	11.4	76
思考・判断	23.8	68
技能・表現	15.4	75
知識・理解	20	66.7

表2 ルーブリック評価各項目の平均値とSD

n = 75

	各項目の平均点
関心・意欲・態度（3）	3.1±0.54
思考・判断（7）	3.5±0.23
技能・表現（4）	4.8±0.6
知識・理解（6）	3.7±0.27

表3 ルーブリック学習活動の平均値とSD

n = 75

	平均値		
	全体	高群	低群
1. 子どもの成長・発達が理解でき、 子どもの特徴を捉える事ができる	3.5±0.94	4.2±0.45	4.0±0.45
2. あらゆる健康段階の子どもと家 族に対して援助ができる	3.4±0.8	3.7±0.28	3.3±0.35
3. 小児看護チームの協働の必要性 が理解でき、責任ある行動がとれる	3.6±0.95	3.7±0.53	3.3±0.53
4. 子どもの人格を尊重して子ども との関わりがもてる	3.5±0.83	4.0±0.5	3.7±0.53
5. 地域社会における小児看護の役 割を理解する	2.9±0.97	3.0±0.52	2.7±0.48
項目全体	3.57±0.4	3.7±0.39	3.4±0.42
総得点	71.4±6.2	75±3.09	66.9±6.28

群3.3±0.53であった。「知識・理解」を多く必要とする評価規準5)の地域社会における小児看護の役割を理解するは高群3.0±0.52、低群2.7±0.48と最も低値であった。

3. 自己教育力尺度

自己教育力総得点と4側面の平均値(表4)を見ると、自己教育力総得点62.6点、4側面ではIの成長・発達への志向が17.07点、II自己の対象化と統制は16.48点、III学習の技能と基盤は15.13点、IV自信・プライド・安定性は13.9点であった。自己教育力総得点の中央値(63点)で高群、低群に分けて4側面を比較してみると、高群のI.成長・発達・志向17.8点に対し低群16.4点、II自己の対象化と統制は高群17.2点に対し低群は15.7点、III学習の

技能と基盤は高群16.5点に対して低群は13.6点、IV自信・プライド・安定性は高群15.4点に対して低群は12.2点(表5)で共に有意差を認めた。自己教育力の高群・低群共に各4側面の得点はIV自信・プライド・安定性が低く、次にIII学習技能と基盤、II自己の対象化と統制、I成長・発達への志向と同じ傾向が見られた。

自己教育力とルーブリック評価の相関(図1)は $rs=0.325, p<0.05$ で弱い正の相関を認めた。

V. 考察

ルーブリック評価は学生の学習活動や自己評価の指針になり課題を発見し、自らの学習への動機付けに繋がるとされている。ルーブリック評価の4つの観点と培いた

表4 自己教育力の4側面の平均値とSD

n = 72

自己教育力 総得点	成長・発達 の志向	自己の対象 化と統制	学習の技 能と基盤	自信・プライ ド・安定性
62.6± 5.54	17.07± 1.83	16.48± 1.66	15.13± 2.22	13.9± 2.38

表5 自己教育力の高群・低群の4側面の平均値とSD

n = 72

	自己教育力の総得点	I 成長・発達への志向	II 自己の対象化と統制	III 学習技能と基盤	IV 自信・プライド・安定性
高群 n=38	66.8± 3.35 *	17.8 ± 1.56 *	17.2± 1.4 *	16.5± 1.53 *	15.4± 2.07 *
低群 n=34	57.9± 3.34	16.4± 1.85	15.7± 1.58	13.6± 1.83	12.2± 1.37

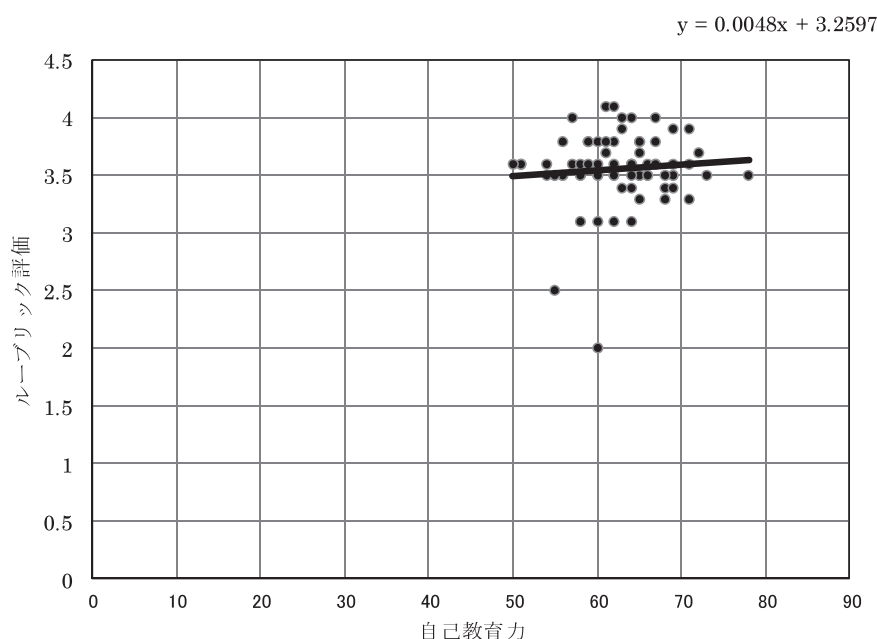


図1 自己教育力とルーブリック評価の相関

い力として糸賀⁷⁾は情意・態度面として「関心・意欲・態度」は自己学習力、情報収集力、共有力、事態への対応力、礼節力、共生力、他者から学ぶ力、感じ取る力、他者を思いやる力、相互成長力であり、高次知的機能面としての「思考・判断」はイメージ力、情報判断力、情報分析力、パターンと捉える力、課題発見力、洞察力、探究力、反省力、論理的に考える力、状況判断力、自己決定力、課題解決力、内省力、メタ認知力であり、学習の結果面として「技能・表現」は表現力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力とし、看護実践力「知識・理解」は知の創造力、最構築力、自己評価力、相互評価力としている。

小児看護学実習は、2週間のうち1週目は保育園実習と心身障害者施設（1日）で2週目が病院実習となっている。そのため保育園実習で子ども達と遊び、保育士と一緒に保育を実践する中で小児の成長発達の特徴を体験し学んでから病院実習に臨むため、子どもと接触する機

会がなく苦手意識のあった学生も子どもに関心を持ち看護ケアを提供することができていた。これらのことが要因となり「関心・意欲・態度」「技能・表現」が75～76%と他の2つの側面よりも高値であったと考える。しかし臨床指導者からも指摘されているように自ら学習する姿勢が少なく、分からないとすぐに教員に聞いてくるなど、自分で調べて学習してから聞く、質問するなどの行動が不足しているため「思考・判断」「知識・理解」が、67～68%と低値であったと考える。また、高群・低群共に5)の地域社会における小児看護を理解するうえで社会的な背景や社会福祉制度、地域の特性など、ベースになる知識が不足しており最も低値であった。全体を通して高群・低群共に同じ傾向を示し、学習の基盤となる「思考・判断」「知識・理解」が低いA短期大学の特徴を示す結果であった。

臨床実習場面で「学習の方法が分からない」という言動や、自分の考えをうまく表現できずカンファレンスで

の発言や報告などに課題を持つ学生が多い。そのため教員は、実際の指導場面で学生のどの部分が弱いかを考えながら、「一緒に調べる」「参考書を提示する」「気づきを基に一緒にリフレクションをする」などの支援をしている。その結果、学習能力が高まる場面を経験している。教員は学習支援方法を念頭にルーブリック評価を活用しながらこの実習で何が求められているか、達成するためにはどうしたら良いか個別に学生に考えさせリフレクティブに関わる必要があると考える。

自己教育力の4側面の平均値はIの成長・発展への思考が高く、これはこれから看護師になるための臨地実習に臨む志向への表れとも考えられる。また、高群、低群の4側面を比較すると明らかに有意差が見られる。また、共に各4側面の得点はIV自信・プライド・安定性が低く、次にIII学習の技能と基盤、II自己の対象化と統制、I成長・発達への志向と得点が上昇する傾向が同じであった。IVの自信・プライド・安定が一番低値であることは、他の研究⁹⁾¹⁰⁾でも指摘されておりこの側面は、3側面を最も深いところで支えるものであり、見通しを持って着実な努力を積み重ね将来看護師としての土台の上に立って前進を可能にする心理的基盤になるとされている。個々が自分なりの自負と自信を持ち、心理的に安定することで自己教育力は育成できる。見方によっては、のびしろの多い成長発達過程の途中ととらえることができ、教員はここが安定できるような支援をする必要があると考える。IIIの学習の機能と基盤の側面も低値であり、基礎的な「思考・判断」「知識・理解」がきちんと身につくという視点が不足している。これはA短期大学の学生の傾向を裏付けている。事前学習の充実とそれを活用し、他者と話し合うことで考えを深めたり広げたりするなど、カンファレンスでの討議などにも必要な要素である。高群のIV自信・プライド・安定性の差が他の3側面に比べると大きくばらつきがある。これは自己教育力の高い学生は考えて行動するがゆえに慎重になり不安になるためと考えられる。きちんと知識を得て実施しようとする基盤を持ち成長・発達への志向と前進する力は高いと考える。低群のIV自信・プライド・安定性の差が弱いのはあまり深く考えず、「これで良い」と思うことが多く受け身的で気づきが少ない傾向のためとも考える。IIIの学習の技能と基盤は自ら学ぶ姿勢が低く、知識を高めようという意識が少ないためばらつきがあると考えられる。これは、自己教育力にも差があり、より個別的な支援が必要であることが示唆された。

自己教育力は主体的に学ぶ意思、態度、能力であり、学習への意欲、習得、学習を続ける意思が重要である。すぐに「わからない」「できない」「やれない」などの言動が多く諦めてしまう学生や自尊感情の低い学生には、忍耐強く深く考えられるようにルーブリック評価を活用

してリフレクションが習慣化できるような関わりも重要であると考えられる。

自己教育力とルーブリック評価の間には弱い相関を認めたが、自己教育力の高い方がルーブリック評価点も高い傾向があるとはいちがいには言えず、データや分析方法に課題が残った。また、ルーブリック評価を始めて2年目であり今後も評価内容の見直しが必要であることや、学生が実習中に携帯し確認しながら振り返りなどの活用が浸透していないこともあり、引き続き調査し検証していく必要がある。

VI. 結論

1. A短期大学の学生は自己教育力の基盤となる「思考・判断」「知識・理解」の低い傾向を認めた。
2. 自己教育力が高い学生の方が、IV自信・プライド・安定性のばらつきが大きかった。より個別的な支援が必要である。
3. 自己教育力の低い学生にはトータル的な支援が必要である。
4. 自己教育力とルーブリック評価の間には弱い相関を認めたが、データの取り方などに課題があり今後引き続き検証する。

VII. 謝辞

本研究をまとめるにあたりご協力頂いた皆様、学生に深く感謝致します。

<引用・参考文献>

- 1) 厚生労働省：新たな看護の在り方に対する検討会報告書<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0324-16.html>、2016、11、3
- 2) 厚生労働省：新人看護職員の臨床実践能力向上に関する検討会<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/03/s0310-7.html>、2016、11、3
- 3) 文部省編：自己教育力の育成などの視点を提起—中央教育審議会教育内容等小委員会が審議経過報告—文部時報 26—43 1983
- 4) 尾崎仁美・山本恵子：自己教育性の側面についての検討—学習態度と生き方の問題との関連から—大阪教育大学学年報第2号 173—184 1997
- 5) 梶田叡一：自己教育への教育。初版 明治図書 1985
- 6) 西村千代子・奥野茂代・小林洋子：看護師の自己教育力—自己教育力測定尺度の検討 日本赤十字社幹部看護師研修所紀要. 11号 22—39 1995
- 7) 糸賀暢子：基礎看護学実習での導入—ポートフォリオとルーブリックを用いた評価の実際—看護教育 2010 DEC.Vol51 No.12 1048-1056

- 8) 梶田叡一：たくましい人間教育を一真の自己教育力を育てる—金子書房 1986
- 9) 川島美佐子：看護学生の「自己教育力」に関する文献的考察 足利短期大学研究紀要 (27) 47-51 2007
- 10) 榎本朋子・田邊美津子：看護学生の入学動機と自己教育力との関連 川崎医療短期大学紀要 32号 7-13 2012
- 11) 酒井明子：看護学生の自己教育力に関する要因—Self-esteemの高低に焦点をあてて— 福井医科大学研究雑誌1 (1) 113-128
- 12) 西谷美幸他：自己教育力の動機づけとその効果—自己教育力研究会の設立と概観— 保健科学研究誌 Journal of Health Sciences No.1 97-103
- 13) 榎本明子・田邊美津子：看護学生の入学動機と自己教育力との関連 川崎医療短期大学紀要32号 7-13 2012
- 14) 松澤洋子・鈴木恵美子：看護大学生の自己教育力に関する研究—自己教育力の学年による違いと卒業後の進路決定— 大阪市立大学看護学雑誌第6巻 19-25 2010
- 15) 下川原久子：看護学生における自己教育力とレジリエンス (1) —ゼミ学生から考察— 八戸学院短期大学研究紀要 第38巻 77-92 2014
- 16) 中村恵子・竹谷英子・佐藤政枝・守田恵理子：学生の自己教育力を伸ばす討議学習の導入とその評価 名古屋市立大学看護学部紀要 第9巻 3-10 2010
- 17) 兼重宗和：自己教育力について 徳山大学論叢 35号 93-105 1991
- 18) 李慧瑛・下高原理恵、緒方重光他：学生の自己教育力と特性的自己効力感の関連調査—実習でのリフレクティブサイクルを通じて 看護教育2016 AUG Vol 57 No. 8

著者への連絡先：菊池美保子 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部看護学科

TEL：046-822-8776（直通）

E-mail：kikuchi@kdu.ac.jp